

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生みその二、1

その 359

ここに 二柱の神議り（はかり）たまひて、今、吾が生める子ふさはず。なほうべ 天つ神の御所（みもと）に白（まを）さな」とのりたまひて、すなわち共に参い上がりて、天つ神の命を 請ひたまひき。ここに天つ神の命もちて、太ト（ふとまに）に ト（うら）へてのりたまいひしく、「女（おみな）先立ち言ひしに因りてふさはず、また還り降りて改め言へ」とのりたまひき

右の古事記の文章は正当な子生みに失敗した 岐・美二柱のみことの反省の文章であります。「神様でも失敗するのか」などと思ったら、古事記の真意から外れてしまいます。人間が初めて心の先天構造の原理を発見し、その先天構造から 正系の言語を作り出そうとするときの苦心談なのだと思えば納得できることであります。

神話の言葉道理を解釈すれば、「岐・美二神は相談して生まれた子は正統な子ではなかった。天上の神のところへ行って申し上げよう」と言って、二人して天上の神に新しい命令をください、とお願いした。天上の神は太占（フトマニ）のうらないをして「女が先だって言ったのがいけなかったのだ。改めて下って行って、順序を間違えずに言え」と命令した、となります。

毎度お話することですが、古事記神代の巻きが言霊学の教科書であることを頭に置けば、意味は大分違ってきます。真意は次の通りです。

現象である子音を生もうとして、母音を先に発音して後に父韻をつけたのでは適当でなかった。再び心の先天構造である一七個の言霊からなる天津磐境の原理に立ち返って、基本の原理から再検討してみよう。

その 先天十七言霊の原理である布斗麻邇に照らし合わせてみると、母音を先にして父韻を後に発音したのがいけなかったのだ。再びやりなおして、父韻を先に母音を後に発音するように改めることだ、と気づいたのであった。

注一、 古代、アイウエオ五十音の言霊とその原理・法則 を布斗麻邇（ふとまに）と呼んだ。二千年前この原理が社会の表面から隠されることとなり、「大道廃れて仁義あり」とあるように 布斗麻邇といえば 鹿の 肩の骨や亀の甲羅を焼いて、浮かび出た模様によって 吉凶を占う占術と思われるようになった。

そのため布斗麻邇の言葉に「太占」の字を当てた。 また「占へて」という古語は「うら合へて」とも言った。

うらは裏・ ころのことで、表面の目に見える事柄を裏の心から検討する、 という意味である。 今の「うらない」の意味とは異なるのである。

その 360 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生みその二 、2

その 360

彼ここに降りまして、更にその天の御柱を往き廻りたまふこと、先の如く成城なりき。 ここに伊耶那岐の命、まづ「あなにやし、えをとめを」とのりたまひ、後に妹伊耶那美の命 「あなにやし えをとこを」とのりたま

ひき、かくのりたまひ竟へて、御合いまして、子淡道の穂の狭別（さわけ）の島を生みたまひき。

この文章は、子生みに失敗して反省し、先天の構造に照らし合わせて、子音を生む正当なやり方である、父韻を先にし母音を後に発音する方法の 実行に取りかかる項であります。文章自体の意味は説明を要しないことではありますが、ここに注目しなければならぬ二つの事柄がありますそれをお話ししましょう。

まず第一に子音を生む前になぜ「あなにやし えをとめを」という感動・愛情の表現を入れたかであります。

男女が結合するときにはお互いの愛情が大切です。

それなら実相である子音を生む時の感情の役割とは何なのでしょうか。 想像意志の発動で現象を生む  
時には、特に愛とか慈悲と言う純粹の感情の世界、言靈アの立場に立つことが必要であることをこの  
文章は教えているのです。昔の言葉でそれを「明かき心」といいます。言靈アの心に立つとき、人は  
物事の実相を最もよく見ることが出来、最もよく表現することができるものなのです。

その 361 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生みその二、3

その 361

次に岐美二神はこの文章以降次々と十四の島を生んでいくことになるのですが、三十三の子音を生む前になぜ島を生んだのでしょうか。これが第二の問題です。島とは以前にも話し出しましたが「締まり」

の意味です。事務所で夕方帳簿などを「締めた」と言えば、閉店となり、金銭の出納を今日 1 日分としてまとめ、昨日までの、そして翌日からの出納と区別した、という意味でありましょう。それなら岐美二神の子生みに先立って生まれた島とは何の区別をするのでしょうか。

古事記はこの本の初めに「天地の初発の時」以来 次々と神が生まれました。その神々は言霊のことでありました。そして今までに先天十七神、十七個の言霊が生まれています。これより後 三十三個の言霊も生まれてきます。島とは これらの言霊が心の宇宙のどの位置空間を占有しているか、それらの言霊を示す 神々の宝座は何処か、を示すものなのです。

先にお話ししましたように、心の宇宙は全部で先天 17 個、後天三十三個、合計五十個の言霊で

構成されていますが、それらの言霊はすべて 宇宙の中の時・処・位を持っています。この占有の座を示すのが島と言うわけなのです。

岐美二神の子生みに先立つ「島生み」には全部で十四の島が生まれます。そのうち五島 が今まで出てきました先天十七言霊の座であり、次の三島がこれから生まれる三十三個の後天子音の座、残り六島が五十音言霊を操作・運用する作業を占める座ということになります。これによりすでに出ました淡路の穂の狭別の島を含めて、まず先天十七神の占める五つの島について説明し、続く島々につまましては、子音創生とその運用の話の区切りの都度説明を入れて行くことにいたします。

注一、この言霊の占める島と同様な意味を持つものに、仏教の曼荼羅図がある。仏や菩薩の絵の



姿の配置によって精神宇宙図を表したものである。しかし言霊学における言霊の島は 曼荼羅図と違い

時処位を持った極めて立体的なものである。

その 362 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生みその二 、4

その 362

そして 先天構造の五段階の宇宙剖半を経て 想像意志のイ・ワの働きで子音（現象）創生となります。

でありますから、アとワはイとワの現象を創造する働きの予（あらかじめ）の区分とすることになります。

この伊豫（いよ）の二名島（ふたなしま）について「身は一つにして面四つあり」と説明されています。

「身一つ」とは言霊ウの一音のこと、面四つとはオエヲエの四音のことを言います。また「伊豫の国を愛比売（えひめ）といひ、讃岐の国を飯依比古（いひよりひこ）と言ひ、阿波の国を大宜都比売（おおげつひめ）といひ、土佐の国を建依別（たけよりわけ）という」とあります。

愛比売とは言霊工を秘めている意で、言霊工とは 経験値オの中から選ぶことでありますから、工秘めとは言霊オであります。飯依比古とは、飯はイの霊で言霊のこと、依（より）は選（よ）るの意、比古は男であり主体であります。言霊を選（よ）る主体ですから言霊工です。大宜都比売とは、大いによろしい都(宮子)を秘めている、ということ。都とは言霊によって 組織された 完成体というほどの意味であり、言霊ヲであります。建依別とは、建は田の気で言霊のことであり、建依別全部で言霊を選り分けたもの、と成り言霊工となります。

伊豫・讃岐・阿波・土佐の四国の名と言霊との関係はまだわかりませんが、多分四つの面の表現を四つの国に掛けたものと見て間違いないものと思われます。

その 363 につづく

古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生みその二、5

その 363

次に隠岐の三つ子の島を生みたまひき。またの名は 天の忍許呂別

言霊オ・エ・ヲ・アの精神宇宙における区分。隠岐とは隠り神、三つ子とは三段階目にあらわれると言霊

という意味です。天の忍許呂別とは先天構造における (天)大いなる(忍)おし心(許呂)の部分と言うこと。

言霊音オ・ヲ(経験知)と言霊エ・アへ (実践智)とは文明創造上の上で最も重要な精神性能であり

ます。

次に竺紫（つくし）の島を生みたまひき。この島も身一つにしても面四つあり。面ごとに名あり。かれ  
竺紫の国を白日別（しらひわけ）と言ひ、豊の国を豊日別（とよひわけ）と言ひ 肥の国を建日向日  
豊久土比泥別（たけひむかひとよくじひねわけ）といひ、熊曾（くまそ）の国を建日別（たけひわけ）と  
いふ。

父韻である言霊チイキシリヒニの占める位置を竺紫の島といいます。 竺紫は尽しの謎、八つの父韻  
は現象を生む人間の創造知性の基本である律を尽くしています。古事記神名で言えば、宇比地邇の  
神・妹須比智邇神・角杵の神・妹活杵神・意富斗能地神・妹大斗乃辨神・於母陀琉の神・妹阿夜訶  
志古泥の神の宝座と言うことです。

八つの父韻は言霊イ(伊耶那岐神)の実際活動のリズムです。それでこの島は「身一つ」と言われます。

面四つとは八つの父韻は実は作用反作用の関係にあるチイ・キミ・シリ・ヒコの二対四組の知性の律であ

ることを示しています。「身一つにして面四つあり」の意味をお分かり頂ける事と思います。

その 364 につづく

古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生みその二、5

その 364

「かれ竺紫の国を白日別といひ、豊の国を豊日別といひ・・・」という四つの国の区別を 並べて見ますと

次のようになります。

竺紫の国 白日別 言霊シリ

豊の国 豊日別 言霊チイ

肥の国 建日向日豊久土比泥別 言霊 ヒニ

熊曾の国 建日別 言霊キミ

さて並べて書きました四列のそれぞれの国の名または別の名と父韻言霊との関係にご注目ください。

白日別の「しら」と父韻シリ、豊日の「とよ」と 父韻チイ、熊曾の「くま」と父韻キミ これら三組の二次

同士が共に五十音図の同じ行であることにお気づきになることと思います。古事記の筆者太安万侶はこ

のようにして国名または別の名によって、それが指示する父韻言霊を暗示したのです。

そしてその暗示があまりにも露骨ですぐわかる謎に過ぎる、と感じたのでありましょうか、父韻ヒニに対してだ

けは肥の国・建日向日豊久土比泥別という長い名前を使いました。

しかしこの長い名前も父韻ヒニを示す古事記の神名である於母陀琉の神・妹阿夜訶志古泥の神の謎が

解けてしまった今では、容易にその暗示を解くことができます。

於母陀琉とは 面足（おもたる）で「心の内容の表現が心の表面いっぱい完成する韻」であります。

その意志の働きは「建日向」（たけひむか）として言霊が日に向かってゆく、という表現で示されています。

また日豊久士比泥（ひとよくじひね）とは奇しき霊の音の意味で、「阿夜訶志古泥」（あやかしこね）

即ちあやに畏き音と符合しているではありませんか。以上を竺紫の島の「身ひとつにして面四つ」の四の面

について説明しました。

その 365 につづく

古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生みその二、6

その 365

壱岐の島またの名は天比登都柱（あめのひとつはしら）。

言霊イ・杵の精神宇宙における意志の区分伊耶那岐・美二神の宝座。壱岐（いき）とは、伊の気で

イ言霊のことです。

天比登都柱（あめのひとつはしら）とは 天の一つの柱のこと。言霊イと井は絶対観の立場では二霊  
が一体となって、人の心の宇宙であるアオウエイの五段階の宇宙を縦の一つの柱として統一しています。  
アオウエイとワヲウエ井は一つになって 天の御柱となります。

この天の御柱の一つの柱は五段階の宇宙構造を人間が自覚した姿として、精神宇宙の今・此所(中  
今)にスクッと立っているのです。心のすべての現象はここから現れて、また此所に帰っていくのであります。



次に津島を生み給へひき。またの名は天の狭手依比売（さでよりひめ）といふ。次に佐渡の島を生み  
たまひき。次に大倭豊秋津島を生みたまひき。またの名は 天つ御虚空そら豊秋津根別といふ。かれこ  
の八島のまず生まれしに因りて、大八島 国といふ。

然ありて後還ります時に、吉備の児島を生みたまひき。またの名は 建日方別（たけひがたわけ）と  
いふ。次に小豆島小を生みたまひき。またの名は大野手比売（おほめでひめ）といふ。次に大島を生  
みたまひき。またの名は大多麻流別（おほたまるわけ）といふ。次に女島（ひめしま）を生みたまひき。  
またの名は天の一根（ひとつね）といふ。次に知訶（ちか）の島を生みたまひき。またの名は天の忍  
男（おしお）といふ。次に 両児（ふたご）の島を生みたまひき。またの名は天の両屋（ふたや）といふ。

天津磐坂と呼ばれる心の先天構造の五段階の区分を示す五つの島々の誕生に続いて、古事記の鳥生  
みの章では 津島・佐渡の島・大倭豊秋津島、次に吉備の児島・小豆島・大島・女島・知訶の島・両  
児の島等々の島々を生みます。

これらの島のうち大倭豊秋津島までの三島はこれより生まれます三十二子音の区分であり、次に続く六  
島はそれまでに現出した合計五十音言霊の整理・運用法を示す区分のことであります。これらの島々に  
ついての説明はそれぞれの言霊・整理法の 区切りの処で一つ一つ説明することにいたします。

その 366 につづく